九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元稹楽府古題「董逃行」考

長谷川，真史
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/16512

出版情報：中国文学論集. 38, pp.34-48, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

元稹楽府古題「董逃行」考

長谷川　真　史

一　元稹「楽府古題序」の制作背景

中唐の詩人・元稹（七七九～八三一）は白居易（七七二～八四六）・李紳（七七二～八四六）らと共に新題の楽府を唱和し、楽府制作の新たな一局面を切り拓いた。その中で、元稹「楽府古題序」[1]にまとめられた楽府作品群の中に古題を用いた楽府作品が存在することは注目に値する。「楽府古題序」は、元稹が通州に左遷された後、元和十二年（八一七）に通州司馬として興元府に使者として赴き、帰途に梁州に立ち寄った際、劉猛と李餘という二人の進士の制作した「古楽府詩数十首」のうち、「新意」あるもの十九首を選んで唱和した楽府作品群に付された序文である。その十九首の作品名は以下のようなものである。

1「夢上天」　2「冬白紵」　3「将進酒」　4「採珠行」　5「董逃行」
6「憶遠曲」　7「夫遠征」　8「織婦詞」　9「田家詞」　10「俠客行」　…　劉猛と唱和した作品　十首
11「君莫非」　12「田野狐兔行」　13「当来日大難行」　14「人道短」　15「苦楽相倚曲」
16「出門行」　17「捉捕歌」　18「古築城曲五解」　19「估客楽」　…　李餘と唱和した作品　九首

これら十九首の唱和作品の大半は新題の楽府である。その中で古題を用いているのは、2「冬白紵」（舞曲歌辞・雑舞）、3「将進酒」（鼓吹曲辞・漢鐃歌）、5「董逃行」（相和歌辞・清調曲）、10「俠客行」（雑曲歌辞）、13「当来日大難行」（相和歌辞・瑟調曲）、16「出門行」（雑曲歌辞）、18「古築城曲五解」（雑曲歌辞）、19「估客楽」（清

商曲辞・西曲歌）の八首である。[2] このうち、3「将進酒」や5「董逃行」は漢魏に由来をもつ楽府古題である。

一方、元稹は元和三年から四年（八〇八～八〇九）にかけて李紳・白居易らと共に古題に拠らない楽府制作を標榜して、「新題楽府」を制作しており、この点は「楽府古題序」においても明言されている。元稹は『詩経』『楚辞』以降の詩の傍流を「歌」と「詩」とに分類し、詩と音楽の先後関係によって明確に分類している。[3] 楽曲の亡佚によって、後世の詩人には音楽に通暁する者が稀になり、本来の「歌詩」の区別を不明確にして、詩人の感興に合った楽府題を選択するような文学形式へと移行した。そして、句の長短によって「歌」と「詩」を区別するようになったのである。[4] 以上のような「歌詩」論を前提として、さらに元稹は、以下のような「楽府」論を展開し、併せて「楽府古題序」及び十九首の唱和作品を制作するに至る経緯を述べている。

沿襲古題、唱和重複、於文或有短長、於義咸爲贅賸。尚不如寓意古題、刺美見事、猶有詩人引古以諷之義焉。曹劉沈鮑之徒、時得如此、亦復稀少。近代唯詩人杜甫「悲陳陶」「哀江頭」「兵車」「麗人」等、凡所歌行、率皆**即**事名篇、無復倚傍。予少時與友人樂天、李公垂輩、謂是爲當、遂不復擬賦古題。昨梁州見進士劉猛、李餘各賦古樂府詩數十首、其中一二十章、咸有新意、予因選而和之。其有用古題、全無古義者、若「出門行」不言離別、「將進酒」特書列女之類是也。其或頗同古義、全創新詞者、則「田家」止述軍輸、「捉捕詞」先螻蟻之類是也。劉李二子方將極意於斯文、因爲粗明古今歌詩同異之旨焉。

古題を沿襲し、唱和重複し、文に於ては或は短長有り、義に於ては咸贅賸有り。尚ほ古題に寓意して、見事（＝現事）を刺美し、猶ほ詩人の古を引きて以て諷するの義有るに如かず。曹（植）劉（**楨**）沈（約）鮑（照）の徒、時に此くの如きを得たるも、亦た復た稀少なり。近代唯だ詩人杜甫の「悲陳陶」「哀江頭」「兵車」「麗人」等、凡そ歌行する所、率ね皆 事に即きて篇に名づけ、復た倚傍する無し。予 少き時 友人楽天、李公垂の輩と、是を謂ひて当と為し、遂に復た擬して古題を賦せず。

昨 梁州に進士劉猛、李餘 各おの 古楽府数十首を賦したるを見、其の中一二十章、咸新意有り、予 因りて之に和す。其れ古題を用ゐて、全く古義無き者有り、若へば「出門行」に離別を言はず、「将進酒」に特だ列女の類を書くは是なり。其れ或は頗る古義と同じくして、全く新詞を創れる者、則ち「田家」に止だ軍輸

を述べ、「捉捕詞」に螻蟻の類を先とするは是なり。劉李二子　方将に意を斯文に極めんとし、因りて為に粗ぼ古今の歌詩の同異の旨を明らかにす。

以上に示したように、元稹は、唱和を重ねて本来の形態を失する弊害を述べ、古題を用いる場合にも諷諭を第一義とすべきであると主張している。後世の詩人については、唯一、杜甫の歌行を高く評価している。そして李紳・元稹・白居易らが杜甫の制作態度に共感し、古題に拠らない楽府制作を志向したことについても言明している。では、なぜ元稹は元和十二年に至って古題を用いた楽府作品を制作したのであろうか。

後半の「楽府古題序」及び十九首の唱和作品制作の背景を説明した部分にも、「進士劉猛李餘各賦古楽府詩数十首」と、はっきりとこれらの作品が「古楽府」であることを述べている。しかし、元稹はこれらの「古楽府」に「新意」を認めており、「其有用古題、全無古義者」と「其或頗同古義、全創新詞者」とに、具体的な作品名を挙げて特徴を解説している。つまり、これらの「古楽府」が従来の「擬古楽府」と一線を画すものであり、むしろ李紳・白居易らと唱和した新題の楽府作品の流れを汲むものであることがわかる。しかし、元稹が何故敢えて古題を用いて楽府作品を制作し、新題の楽府も含めて「楽府古題序」として包括したのか、その意図については疑問が残る。

楽府文学史上において、元稹「楽府古題序」は特に中唐における新楽府の出現に関わる重要な資料として位置付けられている。この序文は、北宋・郭茂倩撰『楽府詩集』において「新楽府辞」の解題[5]に援用されて以来、元白を中心に醸成された新楽府制作の理念を総括したものとして受容されてきた。しかし、憲宗元和年間の政治情勢と元白の事跡から元稹「楽府古題序」制作の背景を検討してみたとき、一連の運動として一貫した論理の下で構築された文学理論とは必ずしも言い切れないことは容易に看取されるだろう。元稹は李紳・白居易らとの新題楽府唱和の後に二度に亘る左遷を経験しており、政治的立場や利害関係の変化の中にあって、その独自の理論をさらに展開していったものと考えられる。

その一方で、十九首の唱和作品群については、従来あまり注目されておらず、その特質について十分に論究されているとは言い難い。[6] これら十九首の作品について、赤井益久氏は論文「中唐詩壇諷諭詩の系譜[7]」で、元稹は白居易との唱和を通して、「新題楽府」に欠如していた「衆庶への同情・注視、説諭・教訓」といった主題を盛り込み、

「技法上からは歌唱への配慮、措辞の平易化、卑近な比喩や即物的比興による主題の単純化、委曲を尽くした構成等」の改良が為されたことを指摘している。この中で「説諭・教訓」という主題は元稹の生きた貞元・元和年間の時代背景と大きく関わる部分であり、更なる考究を要する部分であろう。本稿では、この「説諭・教訓」を主題とする作品に焦点を当て、特に董卓の死と後漢末の動乱を主題として、安史の乱以降の政治情勢を批判した「董逃行」を取り上げる。

二　楽府古題「董逃行」の来源

「董逃行」は漢魏に来源を持つ古楽府題である。元稹が、劉猛との唱和という形式であるにせよ、このように古い来歴を持つ楽府題を選択するに至ったかという点について分析を加えるにあたって、まず、この楽府題「董逃行」の来源に遡り、中唐に至るまでどのように唱和が重ねられてきたかを整理する必要があるだろう。

『楽府詩集』巻三十四「董逃行」解題に拠れば、その起源は概ね二説に分類される。まず、『後漢書』「五行志」に、後漢末、霊帝の中平年間（一八四～一八九）、「京都（洛陽）」に次に示すような童歌が流行したとの記述が見える。

承樂世董逃　遊四郭董逃　　楽世を承け　董逃、四郭に遊び　董逃、
蒙天恩董逃　帶金紫董逃　　天恩を蒙り　董逃、金紫を帯び　董逃、
行謝恩董逃　整車騎董逃　　行きて恩に謝す　董逃、車騎を整へ　董逃、
垂欲發董逃　與中辭董逃　　発せんと欲するに垂（なんなん）として　董逃、与（とも）に中辞（ぬけだ）し　董逃、
出西門董逃　瞻宮殿董逃　　西門を出で　董逃、宮殿を瞻（み）　董逃、
望京城董逃　日夜絶董逃　　京城を望み　董逃、日夜絶え　董逃、
心摧傷董逃　　心摧け傷む　董逃。

以上のように、各句末には全て「董逃」と、合いの手のような節回しが繰り返されている。『後漢書』によれば、

「董」とは董卓のことを指しており、董卓の専横と敗走を描いたものであると解釈が下されている。さらに、劉昭注に引く『風俗通』によれば、後漢末の動乱において政権を掌握した董卓は歌の節が「董（卓）が逃げる」と聞こえるために、これを発禁処分にしたという。『後漢書』『三国志』の董卓の本伝によれば、董卓が政権を掌握したのは霊帝が崩御した後のことである。董卓は献帝を擁立して、洛陽から長安へと強引に遷都し、洛陽で非道の限りを尽くした。しかし、その後、孫堅との戦いに敗れ、洛陽から長安へと逃亡している。「董逃」というのはこの事件を指して言うのであろう。洛陽で童歌が流行していたのは霊帝在位中の出来事であるので、董卓の敗走を予言した歌のようにも見える。恐らく、董卓は政権を掌握した後、自分にとって不吉に聞こえる「董逃」の歌詞を改めさせたのであろう。しかし、霊帝在位中に歌われていた元来の「董逃」がそもそもどのような意味であったのかについては言及されていない。

もう一方の説として、『楽府詩集』「董逃行」解題が引く呉兢撰『楽府解題』に見える古辞は、『後漢書』の記述とは全く異なり、不老長生を主題としたものとなっている。以下に引用する。

古詞云、「吾欲上謁從高山、山頭危險大難言」。言五岳之上、皆以黄金爲宮闕、而多靈獸仙草、可以求長生不死之術、令天神擁護君上以壽考也。

古詞に云ふ、「吾 上りて謁せんと欲し 高山に従ふも、山頭 危険にして大いに言ひ難し」。言ふこころは五岳の上、皆 黄金を以て宮闕と為し、而して霊獣仙草多く、以て長生不死の術を求むべく、天神をして君上を擁護せしむるに寿考を以てするなり。

ここに引かれる古辞は『宋書』「楽志」に記述が見え、五解（五曲）から構成されている。詳細な出自は不明だが、恐らくは漢代以前のものであり、『後漢書』に見える後漢末に流行した「京都歌」よりも古い来歴をもつものであろう。『楽府詩集』では、この二説を取り上げて「董逃行」の解題としている。しかし、『後漢書』の記述は董卓の死と後漢末の動乱を主題とした元稹「董逃行」の解説上必要な資料と思われるが、古辞や漢魏六朝の「董逃行」の解説としては妥当でない。『楽府解題』には、夫婦の別離を主題とした晋・傅玄「董逃行歴九秋篇」や人生の無常観を描く陸機「董逃行」についても言及しているが、「董逃行」という楽府題そのものとの関連は未詳としてお

り、むしろ、古辞及び漢魏六朝までの「董逃行」の解題としては不十分であるように思われる。

ところで、『宋書』の記述では、楽府題「董逃行」が「董桃行」に作られている。古辞が不老長生を主題としている点を鑑みると、むしろ、神仙や不老長生に絡む故事を想起させやすい「桃」に作るのが妥当であるように思われる。実際に「逃」を「桃」に作る用例はこの他にも散見される。『文選』巻二十二「宿東園」詩[8]の李善注に引かれる「古董桃行」や『太平御覧』[9]巻三三九「叙兵器」部に引かれる魏文帝「董桃行」等が挙げられる。また、陸機「董逃行」も、本集巻七[10]、及び『藝文類聚』[11]巻四十一に引用される本文では「桃」に作っている。

「逃」と「桃」は字形字音[12]ともに似通っており、本来「董桃行」であった楽府題が、董卓故事を契機として「逃」の異同が発生したであろうということは想像に容易い。しかし、本来の楽府題が「桃」に作っていたとする資料を求めることは難しい。宋・阮閱撰『詩話総亀』[13]巻七「評論門」に引かれる劉次荘撰『楽府集』[14]に、楽府題「董逃行」に次のような興味深い論説がある。

「董逃行」言神事、傅休奕「九秋篇」十二章、乃叙夫婦別離之思。梁簡文賦「行幸甘泉歌」復云、「董桃律金紫、賢妻侍禁中」、疑若引董賢及子瑕殘桃事、終云、「不羨神仙侶、排烟逐駕鴻」、皆所未詳。按『漢武内傳』、王母觴帝、命侍女索桃、剰桃七枚、大如鴨子、形色正青。以四枚啖帝、因自食其三。帝收餘核。王母問何爲、帝曰、「欲種之」。王母曰、「此桃三千歳一生實、奈何」。帝乃止。于是數過、命侍女董雙成吹雲和笙觴。作者取諸此耶。

「董逃行」は、神事を言ひ、傅休奕「九秋篇」十二章は、乃ち夫婦別離の思ひを叙ぶ。梁簡文「行幸甘泉歌」を賦して復た云ふ、「董逃れ 金紫を律し、賢妻 禁中に侍す」、疑ふらくは董賢及び子瑕の桃を残す事を引くが若きも、終に云ふ、「羨まず 神仙の侶、烟を排して 逐ひて鴻に駕す」、未だ詳らかならざる所なり。『漢武内伝』を按ずるに、王母 帝に觴せんとし、侍女に命じて桃を索めしめ、桃七枚を剰し、大きさ鴨子の如く、形色 正青なり。四枚を以て帝に啖らはし、因りて自ら其の三を食らふ。帝 余核を収む。王母 何為れぞと問へば、帝曰く、「之を種えんと欲す」と。王母曰く、「此の桃 三千歳に一たび実を生ず、奈何せん」と。帝 乃ち止む。是に于いて数ば過ごし、侍女董双成に命じて雲和の笙を吹かしめて觴す。作者 諸此に取らんや。

ここではまず、原唱「董逃行」と傅玄「九秋篇」とを峻別し、それぞれ「神事」「夫婦別離之思」を叙したものであることを述べる。続いて梁簡文帝「行幸甘泉歌」[15]と『後漢書』に引く「京都歌」の類似を指摘した上で、董賢と彌子瑕という二人の人物と楽府題「董逃（桃）行」との結び付きを示唆している。さらに『漢武内伝』の西王母故事に見える女仙・董双成との関連についても触れ、これらの人物と楽府題「董逃（桃）行」とが深く関連していると推測する。

董賢は前漢末の人で、雲陽の人、字は聖卿。『漢書』に本伝が見え、美貌によって哀帝に幸せられた人物とされている。その寵愛ぶりは甚だしかったものと見え、妻子を宮中に置き、二十二歳にして大司馬・衛将軍にまで上り詰めたが、哀帝が崩御するに及んで、王莽に弾劾され自殺している。楽府題「董逃（桃）行」との関連は薄いものの、簡文帝の歌に言う「董」は董賢を指す可能性が濃厚であろう。また、傅玄「九秋篇」で夫婦の別離を主題としている点から、「董逃行歴九秋篇」の解題を補足するものとして挙げられたとも考えられる。

弥子瑕は春秋時代、衛の霊公の嬖大夫（下位の大夫）で、『韓非子』説難に説話が見られる。賢才であったとされ、公の寵愛を得て、果樹園の桃を公と分け合うほどであったとされる。このため、董賢と併せて「桃」との関連を見出されたのであろう。

また、董双成も、西王母の侍女であり、桃の故事との連想から楽府題「董逃（桃）行」と結び付けられたと考えられる。これついて、増田清秀氏は「奇抜な著想ながら、解題としては妥当ではない」[16]との判断を下しているが、『楽府詩集』の解題を補足する論説としては説得力を有するものであるように思われる。

以上の要点を整理して、楽府題「董逃行」の変遷を推測してみたい。まず、漢代以前に春秋時代の弥子瑕や前漢の董双成、董賢等、「桃」を主題とした故事に取材した古辞が創成され、それに伴って「董逃行」の音曲の原型が生成される。続いて、「董逃行」の一種と思しき後漢末に流行した童歌を、董卓の専横と敗走に結び付け、字音字形が酷似していることによって、「桃」と「逃」の異同が発生した。この異同を許した形で、魏武帝・文帝や陸機らによって唱和が重ねられ、中唐に至るまで、「桃」と「逃」は混同され続けた。そして、元稹が新たに董卓の敗死を主題として「董逃行」を唱和し、これらの作品は北宋『楽府詩集』に集大成されるに至る。

郭茂倩は「董逃行」という楽府題自体に総合的な解釈を加えるにあたり、元稹「董逃行」が董卓の死を主題としているため、『後漢書』の記述を加える必要があった。しかし、本来の「董桃（逃）行」は、董卓とは無関係な主題に基づくものであり、元稹の用いた主題はまことに楽府題「董逃行」の新機軸を打ち立てたものであると言えよう。

三　元稹「董逃行」の主題と社会批判

元稹「董逃行」が董卓の敗死と後漢末の動乱を主題として、楽府題「董逃行」の新たな局面を切り拓いたことは、これまでに既に述べてきた。ここでは元稹「董逃行」の本文を読み込むことで主題をより深く分析し、その寓意するところを明らかにしていく。

董逃董逃董卓逃
揩鏗戈甲聲勞嘈　剜剜深臍脂焰焰
人皆數歎曰
爾獨不憶年年取我身上膏
膏銷骨盡烟火死　長安城中賊毛起
城門四走公卿士　走勸劉虞作天子
劉虞不敢作天子　曹瞞簒亂從此始
董逃董逃人莫喜
勝負相環相枕倚　縫綴難成裁破易
何況
曲鍼不能伸巧指　欲學裁縫須準擬

董逃　董逃　董卓逃る。
戈甲を揩鏗して　声　労嘈たり。　剜剜たる深臍　脂　焰焰。
人　皆　数ば歎じて曰く、
爾（なんじ）　独り年年我が身上の膏を取るを憶（おも）はず。
膏　銷（き）え　骨　尽き　烟火　死（なさ）まり、長安城中　賊　毛起す。
城門より　四もに走る　公卿の士、走りて勧む　劉虞の天子と作（な）るを。
劉虞　敢へて天子と作（な）らず、曹瞞の簒乱　此より始む。
董逃　董逃　人喜ぶ莫れ。
勝負　相環（めぐ）り　相　枕倚し、縫綴　成し難く　裁破し易し。
何ぞ況や
曲鍼巧指を伸ばす能はざるをや、裁縫を学ばんと欲して
須（しば）らく準擬するのみ。

第一句では、董卓が孫堅に敗れ、長安へと敗走する様子を描写する。第二句の武器や鎧が擦れる音、そしてざわざわと聞こえる声は、恐らく敗残兵のものであろう。続く第三句では、暗殺された董卓の死体に深々と挿された燈心が、董卓の身体に蓄えられた脂によって燃え続けている様子が描写される。第四句では、董卓の横暴に苦しめられた人々の怨嗟と罵倒の声が生々しく語られる。「貴様が長年知らず知らずのうちに蓄えた脂が、今自分の身体を焦がしているのだ」と。

押韻の点から見ると、「逃」「嘈」「膏」が、共に下平声六豪で押韻しており、ここまでで一段落と見なすことができる。すなわち、董卓の敗走から死に至るまでを描写した部分である。ここでは、「揩鏗（武器や鎧が擦れ合う音）」「勞嘈（兵士達の呻き声）」「剜剜（深々と挿さる様子）」「焰焰（燈心が燃え続ける音）」というように、オノマトペが多用されている。もしかすると、「董逃」も何らかの擬音を示す語として使用されているのかもしれない。

第五句からは、董卓の死体が燃え尽きた後の長安の混乱を描写している。長安に賊が跋扈する混乱の最中、人士達は、人望に厚く皇族の末裔でもある劉虞に皇帝に即位することを勧めるが、権力欲の無い劉虞はこれを受け容れず、ここから曹操（幼名は阿瞞）の政権簒奪が始まった、と述べる。

これらの董卓に関連する故事は、盛唐から中唐への過渡期に勃発した安史の乱を容易に想起させる。ここでの董卓は、もしかすると安禄山その人を指すのかもしれない。また、元稹の「董逃行」全体が安史の乱を起点とした中唐の藩鎮政策[15]批判を主眼としたものであると考えられる。ここまでの内容を安史の乱以降の動乱にスライドさせて考えてみた場合、安史の乱直後の粛宗・代宗の時代よりも、元稹がリアルタイムに接してきた徳宗・順宗・憲宗の時代の社会批判に重点が置かれていると見るべきであろう。

安禄山の死後、地方藩鎮はその権勢を強め、これに対して徳宗は抑圧政策を強行、度重なる弾圧によって藩鎮の反感が高まり、節度使の叛乱が相次ぐ一方で、中央の財政は圧迫され、人民を困窮に陥れた。また、建中四年（七八三）には、叛乱から逃れるために徳宗が奉天に蒙塵するという事件も起きている。第六句に言う「長安城中賊毛起」とは、長安を占領した叛乱兵を暗示しているものと思われる。また、貞元十六年（八〇〇）には淮西節度使の呉少誠の討伐に失敗し、その後の徳宗は地方藩鎮に対して極端な弱腰政策に転換し、地方藩鎮が跋扈する結果とな

る。順宗を経て憲宗に至り、徳宗朝の失策によって跋扈した藩鎮を粛清が行われる。「楽府古題序」が制作された元和十二年（八一七）には、裴度が呉少誠の息子で淮西節度使の呉元済の討伐を命じられている。裴度は元和十年（八一五）に起こった武元衡殺傷事件の際に刺客によって負傷した人物でもある。白居易は武元衡暗殺の犯人捜索を上疏して越権行為を咎められ、元稹もこれに連座している。元白にとっても、藩鎮粛清は身を賭してまで成就すべき社会問題であったと考えられる。

末尾五句では、これらの叙述から導き出される教訓を述べて結ばれている。おおよそ勝敗というものは時運の巡りによるものであるから、董卓が死んだといって喜んではいけない。破壊することは容易いが、一度破壊されたものを修復するのは非常に困難なことである。まして曲った針ではいかに器用な指でも上達せず、裁縫を学んで取り繕ったところで根本的な解決は図れないのである。

これは徳宗が藩鎮抑圧政策の大失敗を受けて弱腰の政策に転換したことを批判すると同時に、憲宗の藩鎮に対する強硬姿勢を支持することを示唆していると解釈できる。

「諷諭」という視点から見れば、元稹が董卓故事に附託して安史の乱以降の藩鎮問題、すなわち、自らが直に接してきた社会情勢を強く批判しているのは自明のように見える。しかし、董卓と安禄山、あるいは董卓死後と安史の乱後の動乱とを直接的に結びつけるような事実や描写は盛り込まれてはいない。恐らく、中唐の社会情勢をリアルタイムに体験しており、元白らが主張する「諷諭」の理念を理解した読み手であれば、董卓故事から安禄山を連想することは容易かったに違いない。しかし、元稹「董逃行」自体から読み取れるのはあくまで董卓故事から導き出される「説諭・教訓」という枠組みを脱するものではない。無論、直接的に社会批判を展開することは危険な行為であり、これを差し控えたと考えることも可能であろう。しかし、通州左遷時という制作背景を鑑みれば、社会に対する使命感から主張せざるをえないという状況とも考えにくく、長安との距離もそれを阻む要因であったであろう。むしろ、劉猛の原唱に対する唱和作品であるという点から考えて、序文にも明記されている「新意」の作品として展開されたと考えるのが妥当であろう。つまり、元稹「董逃行」の制作意図は、古辞や従来の擬古楽府には無かった董卓故事という主題を用いることで新奇さを創出することに主眼が置かれているのではないか。

元稹「董逃行」という作品全体を通して見ると、歌唱に適した構成とは言い難いものの、比較的平易な比喩や措辞によって「説諭・教訓」という観点が強調されていることが確認できる。社会批判という点からこれを解釈した場合、その指向性は批判対象そのものにあり、杜甫の歌行や白居易の「新楽府」のように、民衆への同情を通して社会を批判するような観点はあまり重視されていない。従って、序文に述べられていたような、「諷諭」の第一義性や杜甫尊崇といった新題楽府唱和当時の理念が、「楽府古題」の作品群にも一貫して適用できるとは必ずしも言い切れない。

元稹「董逃行」は、序文でも述べられているように、古題を用いながら、古辞や従来の擬古楽府とは全く異なる内容、すなわち、「新意」に元稹が着目したという側面が強い。従って、白居易との唱和によって改良が加えられた「新題楽府」からの展開というよりは、その新奇性によってインパクトを狙った楽府制作の新機軸であると言えよう。

四　張籍「董逃行」と元稹の「新意」

さて、元稹「董逃行」に対して、張籍（七六六～八三〇）も、この時期に同題の楽府を制作している。[18] 明確な唱和関係を示す資料はないものの、元稹の「董逃行」を受けて制作されたものと見てよいであろう。

洛陽城頭火瞳瞳　亂兵燒我天子宮
宮城南面有深山　盡將老幼藏其間
重巖爲屋橡爲食　丁男夜行候消息
聞道官軍猶掠人　舊里如今歸未得
董逃行　漢家幾時重太平

洛陽の城頭 火 瞳瞳たり、乱兵 我が天子の宮を焼く。
宮城の南面に深山有り、尽く老幼を将て其の間に蔵す。
重巖もて屋と為し 橡もて食と為し、丁男 夜 行きて消息を候つ。
聞道らく官軍 猶ほ人を掠め、旧里 如今 帰るを未だ得ず。
董逃行、漢家 幾時か重ねて太平ならん。

元稹の作と同様、董卓の死後の混乱を叙述しているものの、その主要な視点は、乱を避けて洛陽を離れ、賊に怯えながら困窮の生活を送る民衆を描写することにある。元稹の作には直接的に表出していない「衆庶への同情」と

いう観点を加え、元稹の用いた主題をさらに深化させた作品であると言えよう。その一方、民衆の目を通して叙述するという形式上、元稹の作のように直接的に批判対象を浮かび上がらせるのではなく、被害者の悲劇性を描写することに主眼がある。民衆の悲憤を描写して間接的に社会批判を展開するスタイルは杜甫の歌行に通じる。「丁男」は杜甫「新安吏」に見える用語である[19]ことなどから、張籍の作は杜甫を強く意識したものであると言えよう。この点から言えば、元稹は序文で杜甫に対する尊崇の念を表明しているものの、張籍ほど強く杜甫の歌行を意識したものではないことが確認できる。むしろ、元稹の狙いは読み手聞き手の意表を突くような新奇性、つまり、序文で言うところの「新意」にあった。

以上を要するに、元稹「董逃行」は従来の古辞や擬古楽府には存在しなかった全く新しい主題を用いたものであり、この点こそが、序文で述べられているような、元稹が劉猛・李餘の楽府作品に見出した「新意」であったと言える。そして、この十九首の楽府作品全体には一貫してこの「新意」を見出すことができる。従って、さらにこれらの作品を考究していく際には、この「新意」に着目して論じられるべきである。ただし、個々の作品にはそれぞれ異なった観点や主題が用いられている点にも注意せねばならない。「董逃行」は元稹が直に接してきた社会背景を元に、地方藩鎮問題を批判するものであり、張籍「董逃行」が有する民衆の視点という要素は盛り込まれていない。しかし、十九首の楽府作品全体を通してみれば、白居易との新題楽府唱和を通して新たな観点・改良点が加わっていることに相違はないであろう。従って、今後の元稹楽府研究は、元稹の置かれている社会背景を前提として、「楽府古題序」の「新意」を軸とした一套の作品群としての観点、楽府題ごとの個別的な観点、そして、「新題楽府」からの展開という観点と、多面的な視点から考察されるべきであろうと考える。

注

(1) 四部叢刊『元氏長慶集』巻二十三。また、これ以降に引く元稹の楽府作品も同様。なお、校勘にあたっては、冀勤点校『元稹集』(中国古典文学基本叢書　中華書局　一九八二年)を参照し、その他、蘇仲翔選註『元白詩選』(上海

古典文学出版社　一九五七年）等の注釈書を参考に解釈を加えた。

（2）各楽府題に付した（　）内は『楽府詩集』における分類を示す。『楽府詩集』のテキストは、中津濱渉著『楽府詩集の研究』（汲古書院　一九七〇年）掲載の宋本『楽府詩集』を底本とし、校勘にあたって、中国古典文学基本叢書『楽府詩集』（中華書局　一九七九年）を参照した。

（3）「楽府古題序」の前半部分では、詩の傍流を「賦、頌、銘、賛、文、誄、箴、詩、行、詠、吟、題、怨、歎、章、篇、操、引、謡、謳、歌、曲、詞、調」の二十四種に分類し、「由操而下八名」（操、引、謡、謳、歌、曲、詞、調）については、「斯皆由樂以定詞、非選詞以配樂也（斯れ皆 楽に由りて以て詞を定め、詞を選びて以て楽に配するに非ざるなり）」とし、「由詩而下九名」（詩、行、詠、吟、題、怨、歎、章、篇）については、「蓋選詞以配樂、非由樂以定詞也（蓋し詞を選びて以て楽に配し、楽に由りて以て詞を定むるに非ざるなり）」としている。つまり、元稹は音楽が先行する「歌」のグループと詩が先行する「詩」のグループとを明確に分類しており、これが「歌詩」の本来あるべき姿であると主張しているのである。

（4）原文は以下の通り。「後之文人、達樂者少、不復如是配別、但遇興紀題、往往兼以句讀長短、爲歌詩之異。（後の文人、楽に達する者少なく、復た是くの如く配別せず、但だ興に遇ひて題を紀し、往往にして兼ねて句読の長短を以て、歌詩の異と為す。）」　後世の「歌詩」は音楽の先後関係を基準とする本来の「歌詩」と全くかけ離れたものとなったことを述べている。白居易「新楽府　五十　采詩官」（『白氏文集』巻四）でも、「君兮君兮願聽此、欲開壅蔽達人情、先向歌詩求諷刺。（君よ君よ　願はくは此れを聴け、壅蔽を開き人情に達せんと欲すれば、先ず歌詩に向ひて諷刺を求めよ。）」と、「歌詩」における諷諭の第一義性を主張しており、「歌詩」という概念は元白に強く意識されていることがわかる。これについては、徳宗朝に表れたある種のタームとしての「歌詩」が大きく関連していると見られる。

（5）『楽府詩集』巻九十「新楽府辭」解題。そこで「楽府古題序」の原文の字句を部分的に置き換えたり補ったり、或いは文章構成を前後させたりすることで、論点を新題楽府の解説へとスライドさせていることがわかる。そのうち、いくつかの部分については、本来の論旨から乖離矛盾している点も少なくない。そもそも『楽府詩集』において、「楽府古題序」の十九首の作品は「新題楽府」のように一套の作品とは見なされず、それぞれの楽府題に振り分けら

れており、序文のみを新楽府の解題としているため、このような矛盾した状況が生じたと考えられる。

(6) 先行研究として、范淑芬の『元稹及其楽府詩研究』（台北 文津出版社 一九八四年）に専論がある。

(7) 赤井益久『中唐詩壇の研究』（東洋学叢書 創文社 二〇〇四年）所収。

(8) 『文選』のテキストは胡克家校刊本を底本として、適宜諸本を参照した。

(9) 国学基本叢書『太平御覧』（台北 新興書局 一九六九年）。

(10) 四部叢刊『陸士衡文集』。

(11) 汪紹楹校『藝文類聚』（中華書局 一九七三年）。

(12) 『広韻』によれば、「逃」「桃」はいずれも下平声六豪・徒刀切で同音。因みに、「董」は上声一董・多動切。比較的似通った音である可能性があり、「董逃」は何らかの繰り返しの擬音であるかもしれない。

(13) 周本淳校点『詩話総龜』（中国古典文学理論批評専著選輯 人民文学出版社 一九八七年）

(14) 『楽府集』は佚書。『楽府詩集』に同様の書名が引用されているが、未詳。増田清秀著『楽府の歴史的研究』（創文社 一九七五年）資料編第五章「劉次荘の楽府集・楽府集序解批判」に詳細な論考があり、これらを参考にした。

(15) 梁・簡文帝「行幸甘泉宮」歌は『文苑英華』巻二〇三、『楽府詩集』巻八十四「雑歌謡辞」等に見える。原文を以下に示す。「雉歸海水寂、裘來重譯通。吉行五十里、隨處宿離宮。鼓聲恒入地、塵飛上暗空。赦書隨豹尾、太史逐相風。銅鳴周國旌、旗曳楚雲虹。倖臣射覆罷、從騎新歌終。董桃拜金紫、賢妻侍禁中。不羨神仙侶、排烟逐駕鴻。」

(16) 前掲注（14）参照。

(17) 唐代の地方藩鎮問題については、『日野開三郎 東洋史学論集』第一巻（三一書房 一九八〇年）所収「唐代藩鎮の支配体制」参照。

(18) 四部叢刊『張司業集』巻七。また、解釈にあたって、李建崑校注『張籍詩集校注』（台北 国立編訳館 二〇〇一年）を参考にした。

(19) 『杜詩詳註』巻七「新安吏」に「客行新安道、喧呼聞點兵。借問新安吏、縣小更無丁。府帖昨夜下、次選中男行。中男絶短小、何以守王城。……（客 新安の道を行き、喧呼して兵を点するを聞く。新安の吏に借問すれば、県小に

して更に丁無し。府帖　昨夜下り、次に選びて中男を行かしむ、と。中男　絶(はなは)だ短小にして、何を以て王城を守らん。)」とある。唐代の制度では、年齢によって黄・小・中・丁・老に区別した。丁は壮年、中は青年を指す。

(※)　本論文は、中唐文学会第二十回大会（二〇〇九年十月九日）において、筆者が「元稹『樂府古題序』における『新意』と『諷諭』」と題して口頭発表した内容の一部をもとにしたものである。大会においては、司会の國學院大学・赤井益久教授をはじめ、多くの方よりご批正を賜った。心よりお礼申し上げます。